

同又 3733末

438 599年 599 400 416 199 183

3738 同又 総下176

3,722^P

991 1/2

階書 73? 雲仙岳があるが阿蘇山に丹をさせた

地震る

日本書紀の紀年によれば四一六年

推古七年（五九九）四月二十七日に、大地
 震が起って、建物がすべて倒壊した。そこで
 天下に命じて地震の神をお祭りさせた、とい
 う。
 地震る
 推古七年（五九九）四月二十七日に、大地
 震が起って、建物がすべて倒壊した。そこで
 天下に命じて地震の神をお祭りさせた、とい
 う。
 地震る
 推古七年（五九九）四月二十七日に、大地
 震が起って、建物がすべて倒壊した。そこで
 天下に命じて地震の神をお祭りさせた、とい
 う。
 地震る

地震・阿蘇山の鳴動

第七十一章 阿蘇山

H5.2.8月

3,723P

「なるほど」 ③3733末 「極めて簡潔」と
3734 8行 記さないこと!
③3728-1/3末 この後に記事が無く

という初見があつて、
日本書紀に

明確に記載されたものとして、これは二度
目の地震の記事である。
大日本地震史料「震心火予防」
調査会編 思文閣 巻の表紙

それで、この推古七年四月二十七日の地
震は、大倭国(九州)で起つたのだろうか、

すれども大和国での出来事だつたのだろうか、

↑↑↑↑↑それは明らかだ記されたら、
で、ないか、
が鳴動、
左の地震であつたかも知れない

といふのは、追つて示るように、
紀七年条以後、
阿蘇山の噴火

をおもめせられた記事が、
この時(推古七年四月二十七日)を境に、

阿蘇山の火山活動が、
活発化したの、
と巻えてみたい。

*

魏倭人伝 59p
147~167
百科 26-470
147~167
東洋史 621
後漢 470

26
百科 470

3724p

26
百科 470

百科 26-470
東洋史 621p

蘇迷盧の山 (須彌山)

中国への仏教の伝来時期については、多くの伝説があつて定かでないが、紀元前後の頃には世に知られてゐたやうなものであり、~~一~~やがて正史に登場する。

後漢の永平八年(六五) ~~明帝の異母~~

弟である楚王英が仏教を信じて、仏事供養をおこなつたといふ。(「後漢書」楚王英列伝)

また、その二年後(六七)には、迦葉摩騰、竺法蘭がインドから洛陽へきて、「四十二章経」などを翻訳したと伝えられている。

後漢の桓帝(在位一四一〜一六七)の頃からである。

後漢の次の三国時代になると、「訳経の注釈」まで成すようになり、仏教が中国に於

著される

3,726^P

けいけん
敬虔 692^P
神仏に對しての深い

魏志卷57

相違 1281^P

竹取物語
4015^P
3772^P

ひつと
仏徒 1951^P

の火の山の話が伝えられたなら、敬虔なる
 仏徒となった中国人達は、
 迷宮であらう。蘇の山こそ、仏教が教える蘇
 と考えたに相違ない。
 西暦五七年には東海のかなたの倭奴国が奉
 貢朝賀し、さらに、一〇七年、二三九年……
 ……と、倭国の朝貢は続いた。
 阿蘇山が日蘇迷宮と結び付くのは、極めて自然の
 阿蘇山が日蘇迷宮と結び付くのは、極めて自然の

なりゆきだったのであろう。「倭日の国」藤芳義男
 桃源社、一三〇—一三三頁参照

*

ニウホ
恒例行事
569

3761
3722 同文

噴き上がる 1923

3,729 P-1/2

開皇20年 (600年) 隋書卷69

991 P-1/2

5857

火山活動を思わせる記事

中国の史書で始めて阿蘇山のことを記すの

は、隋書である。

阿蘇山有り。其の石、故無くして火起り

天に接する者、俗以て異と爲し、因って禱

祭を行う

と記さぬ。 (隋書倭国伝) 皇真国初 663 参 廻

この当時 (西暦六〇〇年前後の頃) の阿蘇

山は、頻繁に噴火活動を繰返していて、

噴き上げられた煙や熔岩が、空高く昇ってゆき、

まさに天に接しているように見えたのだらう。

山にこたへて俗以て異と爲し、因って禱祭を行うとある

加えて推古紀七年 (五九九) 四月二十七日

条に「地動りて、舎屋悉に破たれぬ。則ち四方に

令して、地震の神を祭らむ」とある。

と記載されている。(第七十一章の冒頭において既述)

倭人達は、阿蘇山が引き起した地震の後な

恒例行事としてばかりでなく

1886 728
 2182
 3730 P
 526
 226

統紀(白)②-165 P
 大日本地誌史料5 P
 統紀(緑)②-41 P
 紀下348 2行 附書
 主記 記録云595 P

にも日禱祭を行つたのであろう、と想像
 される。

又またかなり後代の記録ではあるが、続日本紀、
 聖武天皇の天平十四年(七四二)十一月条を
 見ておくことにしよう。

十一月十一日、大隅国司言す。十月二十
 三日未時より二十八日に至るまで、空中に声
 ありて、大鼓の如し。野雉相驚き、地大いに震

動せり、と。十一月二十五日、使を大隅国に
 遣して検問し、并びに神命を請ひ聞かむ
 とある。

この記事は一見異様だが、大
 隅国の海中に火山の島あり、桜島がある

ことを考え合せてみると、おのおのから、
 「これは、桜島の鳴動のことについて
 述べたものである」といふ
 と納得される。

すなわち、
 へ桜島の山頂から郷音きわたるその轟音は大

3729-1/2 1行

みづうみ 湖 2112
直接道と連絡の
静止した水塊。

なつまつき 夏四月 紀上390'末
南米で雪溶けて惨事あり

つかいえ 沫境 691'
火の口 226'
地88' 鳥海山 999'

3,731' P

三代実録(前)289'
北端 2636'
日本紀1123回

鳥海山 1449'
下は 1539'
明治5年に羽前、羽後に分列

たたえ 1373'
筆法 1874'
統制(白)165'

こ
筆法 1874'
統制(白)165'

鼓のようであり、地は大いに震動した。と、
 いろいろのことを↑↑↑日本書紀の筆法になら
 い↑↑↑おどろおどろしく、野雉相驚き
 「空中に声ありて大鼓の如し。野雉相驚き
 地大いに震動せり」と奇怪な書き表わしかたで記
 めぬる。清和天皇の
 三十三(三)代実録貞観十三年(八七一)五
 月十六日条には、出羽国の鳥海山(山形
 県北端)にある二重式層状火山(成層)現在、直径
 五〇呎の火口に水を湛えるの噴火活動につ
 りて、次のように記述されている。
 「去る四月八日、山上に火あり。土石を焼
 く。また声ありて雷のごとし。た時、山上にあ
 りて、湖の水があふれ出したのたろうか。それ
 とも、夏四月たというの山中に大量の雪が
 残っており、水が噴火の際の熱により
 溶け、一気に蒸下したのだらうか。山より出
 るところの河は、泥水溢し、その色青黒

たがりの泥 1307' 埃
 たがりの水 1274' 埃
 たがりの水 1307' 埃
 たがりの水 1306' 埃
 たがりの水 1364' 埃

大カン 2433 賽 送 オレ イマン
 宿禰 大カン 606 1621
 活の法 2268
 大カン 1877 縁 765 小林 894 2049 随 1030
 大カン 2268 (稲の苗) 改行 三代実前 289
 大カン 565 「火の国」 226

3,732P

十丈とあるのだから、溶岩流の長さは、

く、臭気充滿せり。
 長さ十許丈、相に流れ出でて海口(港)に入ると、
 蛇の随へるものは、その数を知らず。河に縁
 りて苗稼(稲の苗)せしもの、流損するもの
 多し。是の日本(國司)に下知(指図)し宿禰(安全祈願)を賽する云々
 とある。(「火の国」井上辰雄、学生社、二
 二六頁参照)

恐らく

・「長さ十丈ばかりの二つの大蛇」とい
 うのは、噴火口から流れ出した十丈
 ばかりの二つの溶岩流のことであろう。
 つまり、噴火口から噴出した溶岩が二つの
 溶岩流となつて相に山を流れ下り十五
 ほど離れている海に入った。

(「広辞苑」へ溶岩参照)

*

水たものだったのか
 (2) それとも、阿蘇山 引き起された地震が、大
 和国の都でも感じられたのか、
 (3) あるいは、大和国あたりで発生した地震だ
 ったのか、
 水た後代に伝えられたのか、
 などといった詳細については分らない。
 尚、地震という記事のあとに「こう述べている」
 「地震があった夕に、吾襲を遣し、先帝反
 正天皇の殯宮の様子を視察させた。云々」
 阿蘇山という文字を用い得ない筆者達は
 たまたまこの日へ允恭天皇五年七月十四日
 の夕方、殯宮の様子を見に行つた者等の中に
 吾襲山という名の人か居たことに目をつけ、
 へ日 吾襲山を殯宮へ遣わされた者達の代表
 として、日 阿蘇山の掛詞となし、暗に阿蘇山
 の噴火をほのめかすに停めた。✓
 のだろ、うか、
 のか、も知小ない。12.9
 想像の域を出ず、断言でき子わけではない
 ここに、隋書後国伝を見てみると、
 「貴人は三年外に殯す」

たったのか、

3042-2/3

3043-1/2 65

3,735^P-1/2

3042-3/3 3741 3042 466 466

次頁から

とある。
 反正天皇の殯宮は、允恭五年当時、
 東の日辺日本国に（近畿）にあつたの
 かも知れない。（第1表参照）

雄略紀三年四月条には、「闇夜の中の虹」

「（雄略）天皇、檣幡皇女の不在こと
 を疑ひたまひて、恒に闇夜に東西に求覓めし
 めたまふ。乃ち河上に虹の見ゆること、蛇の如

くして、四五丈ばかりなり。云々

と記されてゐる。

「闇夜日向国（今の宮崎県）北部の五十鈴河

の河上に虹の舌のようであり、長さは四・五

丈ほどであつた。云々

といつた意味であろうか。（第五十五章「闇

夜」の中の虹」の項において既述）

に見える

貴人の本葬をすまふ前、棺に遺体を納めて仮に祭る場所

おぼろ

のかが... 632X

2635

前巻の面 面 29 15

3,735 P - 2/2

命受く 74-165

2634 同 3269 P 末

神皇正統記 皇極 199 2634-1/2



蛇を捉取えて、天皇にお見せした。しかし、
 天皇は斎戒なさらなかつた。其の大蛇の雷の
 ような音は、魑魍、目精は赫赫した。天皇は
 畏まられ、目を蔽って御覧にならす。殿中
 にお隠れになった。
 天皇は、大蛇を岳に放たしめたまひ、
 名を賜わつて曰、雷口とされ、と曰う。
 先述の心、仁徳朝頃の国内
 外の騷乱期以後、大和国の三輪山の火は長ら
 く消えていたが、ここに再び

雄略天皇は、少子部連螺羸に詔して、
 「朕は、三諸岳の神の形を見たりと思ふ。
 おまえは、力か人たまさつてゐる。自ら行つ
 て捉えてこいし
 と仰せられた。
 そこで螺羸は、三諸岳(神山)に登り、大
 やかせた、と曰う話がある。
 雄略天皇は、少子部連螺羸に詔して、
 「朕は、三諸岳の神の形を見たりと思ふ。
 おまえは、力か人たまさつてゐる。自ら行つ
 て捉えてこいし
 と仰せられた。
 そこで螺羸は、三諸岳(神山)に登り、大

前巻

3.736^p-1/3

411^N
④3268

要4E-7!
④3269末

④2887^p-2/3
④2634^p 2635^p

次頁から

八三輪山の御神火の項において既に
 八章八猿田毗古と天受売。第六十五章
 水。第四十三章八蛇と三輪山。第四十
 と。いうことを示して、いるの~~だ~~らう、と思ゆ
 た。山頂
 放た水て、三輪山に改めて火がとも
 八神山阿蘇山の火が、岳(三輪山)に

・カ-
 ・右頁の右上
 (本頁)に
 はびびり
 大型
 掲載下記
 ・左右は、適宜
 カ-17下記。

3736^P-3/3



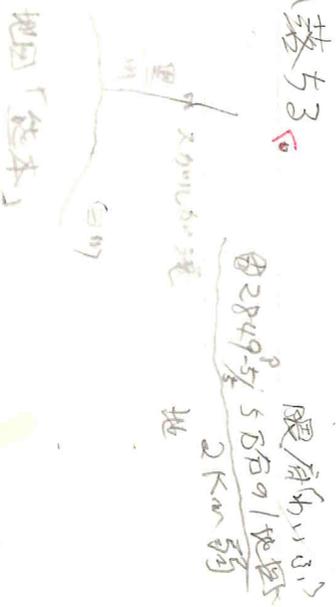
カ-17

カ-17

352

140G 写真図版 664 救鹿流加通

130G
 阿蘇神社 神社経行(17) 学習研究社 2003年3月13日発行 27~28頁参照
 黒川本流の滝で 高土約60m 黒川が白川に注ぎ込め合流点の北2km
 原生林に覆われた谷 一変に流小落ちる



45.2.11(木) 改訂

東 3741 日本霊異記 3324P

3,737P

41M 3319P 1/2

3319P 1/2 紀下103P末

前頁

欽明紀十四年五月一日条に、こう記されたいよ。

泉郡の茅渚海の中に、梵音（仏教の楽）

す。震響、雷の聲の若し。光彩しく晃り耀く

こと日の色の如し。

云仙岳が噴火したことを述べたり

のであろう。（第六十五章へ雲仙岳の噴火の

項において既述）

へ蘇迷廬の山から日が出るといふ話だが、

海の中の雲仙岳からも、日の色のよ似たもの

が噴出した。

といつた意味も含まれていようか。

敏達朝にもまた、雲仙岳が噴火したよう

に日本霊異記（上）第五話に

「敏達天皇の御代、和泉の國の海中に樂

器の音聲有り。笛箏琴篳篥等の聲の如く、或

は雷の振動するが如し。晝は鳴り夜は耀き

東を指して流る。云々

とある。（第六十五章へ雲仙岳の噴火の項

において既述）火山岩や火山灰

なお、雲仙岳から噴出した火柱や煙りは、

なのだろう

OK

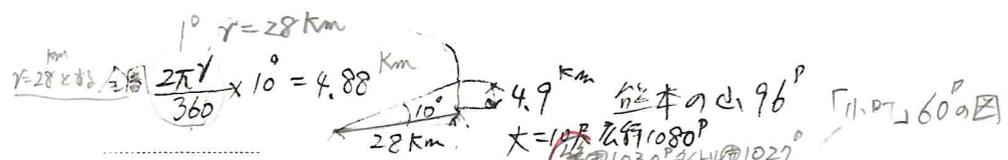
OK

同文 (7074, 赤い彗星であった可能性もある) 同文
 句文 「意味」 顧野 11行
 4819P 同文 紀下203
 天つき改行
 4162 3738 紀下203
 3729 175 3722 紀下176
 3733

東の大倭国(肥後国)の都の方を指して流
 水た
 という情況が記されていいるのだから
 推古紀七年四月二十七日条に「先には
 地震りて合屋悉に破た水ぬ。則ち四方に
 地震の神を祭らむ」とある。
 (第七十一章へ地震・阿蘇山の鳴動
 火山活動を思わせる記事の項の冒頭において既に
 推古紀二十八年十二月一日条には、
 さ水ていりる。
 赤い彗星が出現した可能性もある
 阿蘇中岳の噴火口から中天を目指して立ち
 のぼる火柱は紅く、高さは一丈余り。その形
 はまやかかな流を描いて、まるで雉の尾
 のようであった」という意味なのかも知れない
 では、「長さ一丈餘」とは、どのくらいの高
 さをさすのだろうか。
 古代の天体の三尺は、角度の三度にあたる
 といいう。(「星の古記録」齊藤国治、岩波新

3735 1/2 49
 3744 1/2 154

3729
 先述の(画)



210
3,739P

①1918

書、一二頁。同一九頁参照)

●定かでないが依りに大倭国(肥後国)の小山

山(八九丁)の山頂が、日の縦(東西)の基奠と

れていたのであろう、と考えてみた。

万巻一五二。成務紀五年九月条参照)

(1)三尺が三度ならば一丈余は十度以上である。

(2)小山山から、阿蘇中岳迄は、約二十八

だから、阿蘇の中岳から噴き上げる火柱の

高さは、四・九以上だった計算になる。

赤い、雉尾に似た火柱を、九州の国毎に皆

見るこゝが出来た。うか。(天武紀十一年八

月十一日条参照)

●なお、託麻ヶ原の広い台地上には、まるで小島の

ように点在する可愛らしい三つの山が、現在

一タクマ三山と呼んで、いる。

は先に述べたとおりである。(第二十八章

香山)の項参照)

●一つの山を丁度真一文字に、二つにす

はり、切離したかのように見える二上の山の

は、切離したかのように見える二上の山の

北 神園山
小山 小町 60
2 島山

電の 積み
利到 堀切地を掘り切通は堀
現在 前 15斤

3740^P

次頁から

が見らるる
の山頂

北側の山を「神園山」(一八三三) 下 小山 小山 南
 側の山を「小山山」(一八九三) といふ。 [Shaded Box]
 南に少し離れて「戸島山」(一三三三) がある。
 三つ合わせて「タクマ三山」という。
 「神園山」の頂上は城跡を思わせる台状で
 ある。そのとも「雑木」によってあるは何も見えない。
 「神園山」を下り、小山諏訪神社を抜け、
 尾根伝いに三十分ほど登ると「小山山」の山
 頂につく。ここにも堀切や石積の跡が見られる。
 戸島山の中腹には戸島神社があり、頂上に
 三角突がある。周囲は何も見えない。(「能
 本の山」今江正知、能本日日新聞社、九六し
 九七頁参照)

頂上

灰 601
866

紀下212

3,741-1/3

大カン7209 カン71708
疑心 黒牛

4の
毛野 15年上野と
1874の
下野 紀下212

前頁

推古紀三十五年五月条には、こう記されて

(六二七)

いゝる。

蠅有りて聚集る。其の凝り累ること十丈

(約四九寸)

ばかり。虚に浮ひて信濃坂を越ゆ。鳴る音雷
の如し。則ち東のかた上野國に至りて自づか

らに散せぬ

とある。

噴火による灰(はい)が十丈ほどの幅で

(約四九寸)

凝り累なり。大空を流れてゆく状は、まるで蠅

(はい)が集まって飛んで行くようであり、
阿蘇山が鳴動する音は雷のようであつた。灰

は、信濃の坂(美濃と信濃の境)を越え、さらに東の方へ流小
てゆき、上野國(群馬県)に至つて、ようや

く自づからに散つてしまつた

といつた意味であらうか。(厚真因版 666 火山灰 参照)

尚、灰にも蠅にも、共に日はひびと訓

める。漢和辞典、小林信明、小学館、

灰、蠅、云辞苑、灰、蠅、参照

阿蘇山以外の火山が噴火したのかも知れない。

3739
12=

4.9 km

3,757°

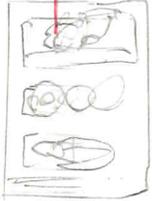
3,741° - 2/3

カラー

カット
←

カット
→

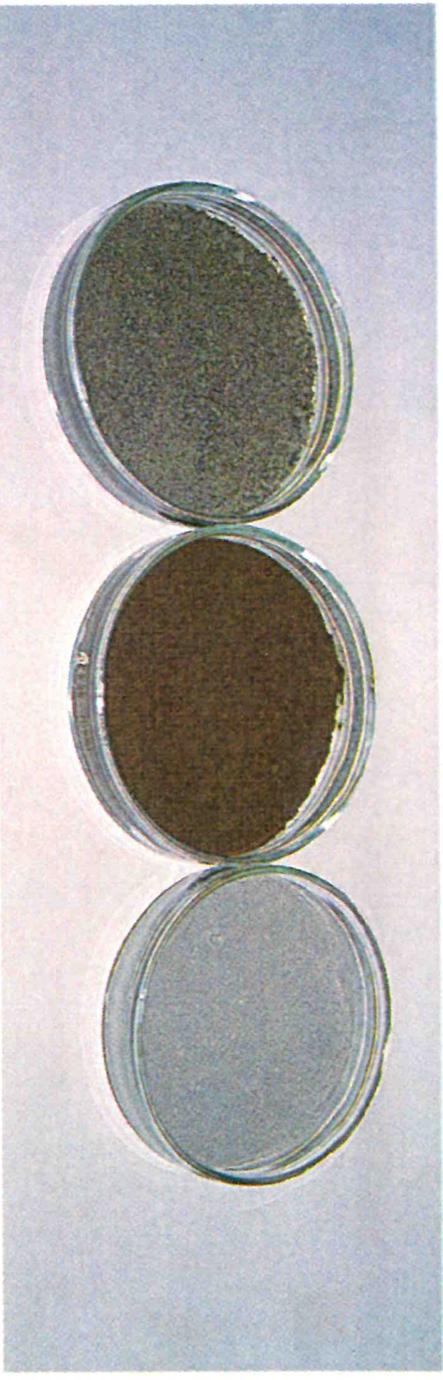
この写真と真の上段に配置。



写真版 142G 665 1990年の阿蘇中岳噴火

カラー
前頁の写真の下に配置する。

359^P



1309 阿蘇の火山灰 (阿蘇中岳、昭和30年代及び平成元年頃のもの)

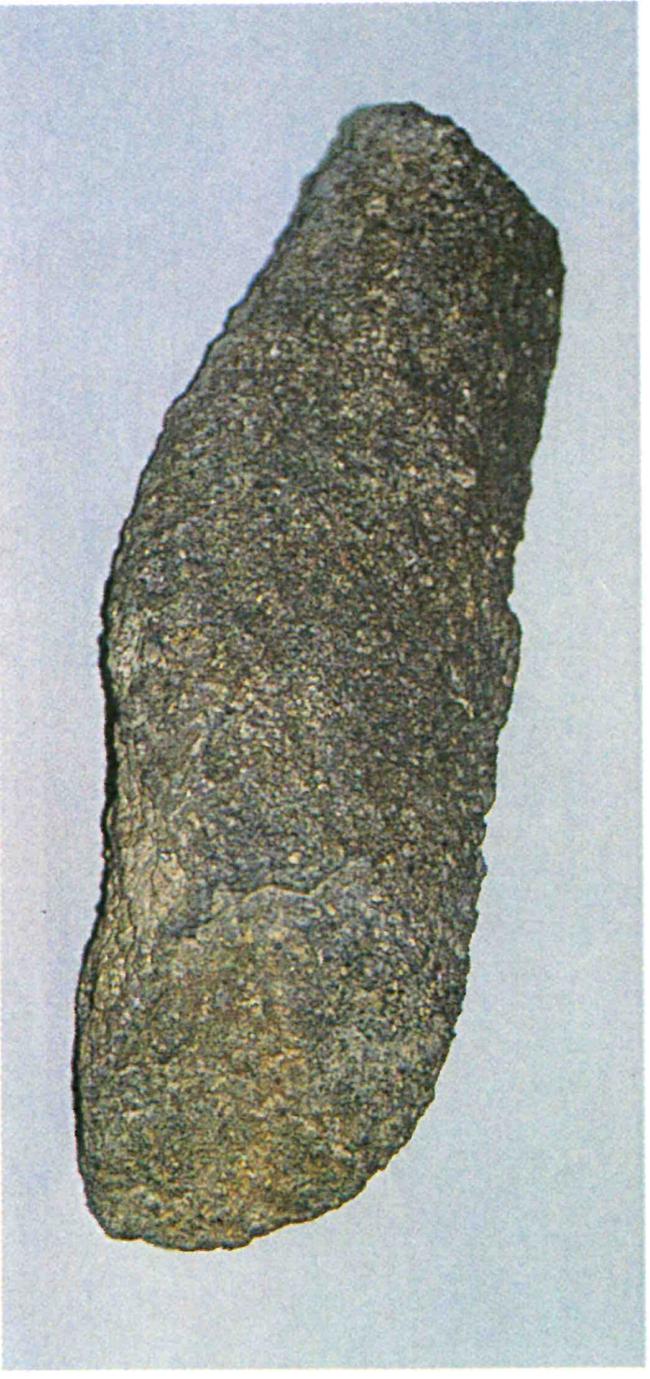
1309 黒 (左) : 阿蘇中岳本来のマグマが噴出したもの。

1309 赤 (中) : 本来のマグマが噴出する際に、鉄分が空気に触れ酸化したものだ。

1309 白 (右) : 本来のマグマではなく、もともと火口底周辺にあった変質した岩石を壊して飛ばしたものだ。

359

3,741^P-3/3



1309 阿蘇の火山弾 (阿蘇中岳、年代不詳)

1309 マグマが空中に飛ばされた際に冷え固まったもので、球形や楕円形をしている。

1409

写真図版 阿蘇山の火山灰 おおが火山弾

1309

『神のむす郷 阿蘇のものがたり展』熊本県文化財保護協会、2006年11月24日発行
59頁参照

H52.14(10) 1992
2258
1992
2258
1992

2258
1992
2258
1992

3742
1992
2258
1992

3742
1992
2258
1992

62.12.31

6281
2045

2045

九州中央の阿蘇山(参照)
恐怖心さつものらせなから時の人
火山弾が風を切る音を

第五段一書第九へ伊奘諾尊の黄泉国探訪条

たりに好んで居るといふ口土雷は神代紀(上)

を揺って伝わつて来る地響は、それは臍のあ

ら頭上をかすめて落ちていった。また、大地

がふき出した石噴火石ともいふは「トーン」と鋭い音を発しなが

なから、雷鳴にも似た轟音が東方から鳴り響いた。

な火柱が噴出した後、トーントーンとやや遅ればせ

な空に向かつて下都の方へ流れた。巨大

な大きな火山弾が、星降るようた、東の口阿

蘇山の方へ流れた。阿蘇の噴火の描写なの

と似たらしくのみらといふ。阿蘇の噴火の描写なの

お。是天狗(漢音で「こう」と訓むなり其の吠ゆる聲、雷

音なりとといふ。是に、僧旻僧が曰はく、曰地雷なり

りて雷に似たり。時の人の曰はく、曰流星の

便ち音有

舒明紀九年二月二十三日条には

こうある

(六三七)

3,744 P-2/2

大コソ 5/2上
未4行 (ニ)

(ニ)

前頁

狐(こ) という。(「大字典」上田万年、講談社へ天
 狐(こ) 参照)

・ いかし「有聲如雷」と記さぬの
 描写

だから「...」やはり「阿蘇山の噴火の描写
 なのかも知れない。

である (2) また、
 へ「天狐」は、天上に住むと云う狐のこと
 である (2) また、
 へ「天狐」は、天上に住むと云う狐のこと

科事典「平凡社へ天狗」参照
 という。「広辞苑」へ天狗参照
 「世界大百

えたし
 と稱して「天のイヌ、またはキツネ」にたと
 えてし
 (1) 因みに述べると、流星の(ニ)を「天狗」

(ニ)

前2頁13行

改行

に雨が降る天気)を思わせる記事である。し

かし、そんな天気は珍しくもないし、日本書

紀に記載するに値しない。

・あるいは、か無かったたもかかぬらす

へ三月三日、雲無し。阿蘇山から噴出した水

蒸気が古京の方へ流れてきて、大気中で冷や

され、雨のようになつた。

と解すべきなのかも知れない。

皇極元年十月には、阿蘇山の活動がさら

に一段と激しくなつたようである。

皇極紀元年十月条を見ると

(1) 十月八日に、地震り雨ふる。

(2) 十月九日に、地震る。是の夜、地震り風ふ

く。

(3) 十月二十四日の夜中に、地震る。

(4) 十月の是の月条に、

「夏の命を行ふ。雲無くして雨ふる」

などと記されている。

火山地震が打ち続き、また水蒸気が冷えて

雨のようになつて来たら、あううかと思われ

る。

(六四三)

皇極二年正月一日の朝にも異変があった。

二年春正月壬子朔旦、五色大雲、満覆於

天、而闕於寅。一色青霧、周起於地。

とある。(紀)

尚、「青霧」は凶兆とされている。「日本書紀」(F)日本古

典文学大系、岩波書店、二四五頁注三二参照)

又、「青」は東方の色である。(大字典講談社、(全青)参照)

元日の夜明け前(阿蘇山の噴火に照らされ)五色の大きな雲が天に

ばいに広がって見えていたが、寅(現在の午前五時)七

時頃までの時刻か)に於て闕けた(少なくとも

つた)。しかしやがて東の方から青色の霧状のものが

地面の上を漂い流れて来て、あたりを包み込んだ。

といった情況が記されているのではなからうか。

もとかいたら、元日の夜明けころ、空を仰ぐと厚い雲が天一

杯に広がっていた。東方・阿蘇近くの雲は煌煌とした赤

色に輝やき、阿蘇から遠ざかるにつれてその

色は変わってゆき、西方の端にはただ真黒

の色、白・青・黒の雲は祥瑞なため、何か良

黄・白・青・黒の雲は祥瑞なため、何か良

の雲は祥瑞なため、何か良

の雲は祥瑞なため、何か良

の雲は祥瑞なため、何か良

紀下245

大カン 2412
紀下245 注32

小林 311P
464P
1019P

3746P
天の字改訂

紀下245 注31
大宛五色
改訂

小林 784P
3748P
改訂

噴石 噴火石 小林 223P
 天狗 天狐
 ツツネ (ツツネ) か?
 3,747
 大カマ 1468
 紅美 1697
 目出 変 (2174)
 小 333P
 山カス
 小林 107P
 改行
 改行
 402, 74
 231
 西硫磺
 硫磺

吟くような音を響かせて降ってきた。土の中

阿蘇山が噴出した噴火石が(東方の彼方から)

覆ってしまっただけ

皇極紀四年正月条にも、奇妙な記事がある。

丘嶺に、あるいは河辺に、あるいは宮

や幸の間、遙かに見える物があり、さら

に猴(紅)の吟くような音が聞えた。或る

時はバラバラと十ばかり、或る時は二十ば

かり。しかし行ってみると、物はどこに消えた

のが見えず、尚鳴きうそぶくような音が

聞えた。その姿は、どうして見ること

が出来なかった。時の人は、

此は是、伊勢大神の使なり

と言った

と、いうのである。

鹿児島地方気象台は12日、桜島（鹿児島市）の爆発的噴火で、昭和火口から南東約2・4キロ先の2合目まで噴石が飛んだ、と発表

桜島噴火 2.4キロ先まで石飛ぶ

動再開以降では、最も下まで飛んだ。気象台は「大規模噴火につながる兆候はない」と説明している。

2合目まで飛んだのは9年3月10日以来。12日午後3時7分の爆発的噴火によるもので、噴石は直径50センチ以上とみられる。鹿児島市によると被害はなかった。桜島の噴火警戒レベルは3（入山規制）のまま。



火口付近には、10メートル以上の岩も飛んだ



小さい噴石は、より遠くへ飛ぶ



高温の火砕流は時速100kmに達し、住宅や森林を破壊した

小さい噴石は、より遠くへ飛ぶ

火山ガス

朝日 令和4(2022)4.25



主成分	臭い
硫化水素	卵が腐ったような臭い
二酸化硫黄	刺激臭
二酸化炭素	無臭

空気と比べると重く、くぼ地や谷地形など低い場所にたまりやすい性質

登山やスキー、山菜採りなどでの事故が多い
噴火時だけでなく普段から注意が必要

255

10巻 333頁
10巻 3927 挿入

(第10巻)
367-2/2

紀F381 紀F381 紀F381
→HS.2.17(4) 紀F360 末

3,748^P

紀F348^P

③3944-1/2 13斤

深く潜り込んでしまつたの(か)であらう。物(もの)は
 見えな(み)いと(う)の(に)、土(つち)の中(なか)で冷(ひ)えてゆく噴(ふん)
 火(か)石(せき)の鳴(な)きうそぶく(よ)うな音(おと)が聞(き)えた
 と(い)つた意(い)味(み)で(あ)らうか。
 尚(なお)、伊(い)勢(せ)の大神(おほ)の使(み)は、梯(てい)儼(げん)(狐(きつね))、つま
 り(り)曰(あま)つ(き)うぬ(狐(きつね))の(こ)とを指(さ)して(い)る(か)も知(し)れ(な)い(第(だい)九(く)表(へい))
 齊(せい)明(めい)紀(ぎ)六(ろく)年(ねん)是(し)歳(さい)条(じょう)に(は)次(つぎ)の(よ)うな記(き)載(さい)が(あ)る。
 富(ふ)士(し)山(さん)か浅(あ)間(ま)山(さん)か(ら)噴(ふ)き上(あ)げ(ら)れ(た)灰(はい)か(ら)下(くだ)る(こ)と
 東(ひがし)から西(にし)へ吹(ふ)く風(かぜ)に(よ)り(て)流(なが)れ(さ)す(こ)の(よ)うな記(き)載(さい)が(あ)る。
 科(か)野(の)国(くに)(信(し)濃(のう)国(くに))か、
 蠅(は)の(こ)と(で)あ(ら)う(と)群(ぐん)水(すい)て(西(にし)に)向(む)か(ひ)
 て、巨(おほ)坂(さか)信(し)濃(のう)と美(み)濃(のう)の(こ)と(で)あ(ら)う(と)群(ぐん)水(すい)て(西(にし)に)向(む)か(ひ)
 う(と)を(と)飛(と)び(こ)ゆ。大(おほ)き(さ)十(じゅう)圍(い)ば(か)り。高(たか)さ(あ)蒼(そう)
 天(あま)に(至(いた)り)リ(と)大(おほ)き(さ)十(じゅう)圍(い)ば(か)り。高(たか)さ(あ)蒼(そう)
 と言(い)つ(て)き(た)と(い)う(と)。(六(ろく)六(ろく)四(し))
 天(てん)智(ち)紀(ぎ)三(さん)年(ねん)三(さん)月(げつ)条(じょう)に(は)、
 星(ほし)有(あ)り(て)京(みやこ)の(こ)の(よ)うな記(き)載(さい)が(あ)る。
 宮(みや)内(うち)省(しょう)に(は)属(ぞく)す(と)炊(た)事(じ)を(と)掌(た)る(と)所(ところ)
 と(あ)る(と)。(六(ろく)七(しち)一(いち))
 天(てん)智(ち)紀(ぎ)十(じゅう)年(ねん)是(し)歳(さい)条(じょう)に(は)、
 宮(みや)中(ちゆう)の(よ)うな記(き)載(さい)が(あ)る。
 大(おほ)炊(た)察(さつ)に(は)八(はち)つ(の)鼎(てい)(王(わ)室(しつ)の)宝(ほう)器(き)

大炊察(おほたひさつ)に、



紀F348 注2に 目塚とある

H36(2018)9.25(火)~9.26(4日)
令和3(2021)1.25(月)~1.16(4日)

宗廟 小林302
宗廟 小林302

余震 2282
(ゆりかえ)

天智改行
紀下581P 近江宮
大炊寮 遺跡 30
初唐 形式 30
政 31

紀下380

3749P

次頁から

1/6 1/5
1/5

とされる三本足で耳一つを持ち、釜が有り、
 そ水がひとりでに鳴った。ある時は一つ鳴り、
 ある時は二つ、ある時は三つ一緒に鳴った。
 そしてまたある時は八つ共一緒に鳴った。
 と記されている。(日本書紀(下)早良天皇系、皇極書卷三六頁注三〇「蘇我」)
 天智十年(六七二)当時の都曰大津宮の
 大炊寮の鼎か、地震および余震(ゆりかえ)に
 よつて、幾度も幾度も自づから鳴った。
 ということを示しているのかも知れない。
 *通常、九鼎というのになぜ一つ足りないのだろうか。(第巻)
 かつこの物語では、(末尾の年表(天智十年)参照)
 大津宮は、近江の大津に相当する所、博
 多湾南岸の大津に先お造られ、その後、大津府
 の地に遷されて、遠の朝廷と称された。
 と考えたい。(追って詳述)
 なお、宗廟(国家)の宝器である鼎が鳴る
 のは、朝廷の存続にかかわる不吉な前兆とさ
 れる。(日本書紀(下)日本書紀(下)早良天皇系、皇極書卷三六頁注三〇「蘇我」)
 はたして、その翌年の天武元年(六七二)
 に、壬申乱が勃発する。